

Camp Meeting in Japan 2021

-第25回日本キャンプミーティング-

報 告 書

<期 日> 2021年9月20日

<主 催> 公益社団法人 日本キャンプ協会

<会 場> オンライン(Zoom)

目次

P2 第25回日本キャンプミーティングの開催に当たって

P3 スケジュール

P4 シンポジウム紹介

P6 ワークショップ紹介

P12 研究発表・実践(取り組み)発表抄録

(付録) Zoom 操作ガイド(基本編)

(付録) Zoom 操作ガイド(ブレイクアウト編)

(付録) Zoom アップデート方法

P21 奥付

第25回日本キャンプミーティング 開催に当たって

第25回キャンプミーティングが、今年も多くの皆様からのご協力を頂いて開催される運びとなりました。心より感謝申し上げます。

(公社)日本キャンプ協会設立55周年キャンプ大会は、「ひろがるキャンプのチカラ！」をテーマに、日本キャンプ協会や都道府県キャンプ協会、キャンプ・野外活動に携わる皆さんが推進してきたキャンプを振り返りつつ、

- 1) これからの社会を担う人を育て、社会課題を解決する手段としてのキャンプ
- 2) 新しい生活様式を取り入れ、社会のニーズに応える新しいキャンプの形
- 3) 私たちキャンプ指導者がこれらに貢献できること

を切り口に、キャンプのこれからの可能性を考える機会として開催されます。第25回キャンプミーティングは、キャンプ大会を締めくくる最終日のプログラムとしても位置づけられています。

今年も研究発表、実践発表、ワークショップ発表では、社会的課題を解決するための取り組み、コロナ禍での実践、これからのキャンプの新しい形に関する提案などバラエティ豊かな内容でご発表いただけることになりました。また、都道府県キャンプ協会の協力を得て、日本キャンプ協会が2016年から取り組んできた「ビジョン2020」の事例発表を行います。皆さんの住まいのお近くにあるキャンプ協会の取り組みを知り、つながりを作るチャンスです。そして、実行委員会企画として、平成生まれでキャンプディレクター1級を取得し活躍されている方々にお集まりいただき、キャンプ協会に関わるこれまでとこれらについて語って頂く機会を作りました。

最後を締めくくるシンポジウムでは、「イマドキのキャンプ」として、これからのを担うコーディネーターを中心に、これまでにキャンプ協会で行ってきた「キャンプ」だけでなく、多様な形で「キャンプ」に関わる方々にご登壇いただき、多様な視点から見た「キャンプ」の「今」に関する意見交換を通じて、これからの「キャンプ」の可能性について考える機会とします。

このキャンプミーティングが、集まるすべての方々にとってキャンプの可能性を広げ、新しいつながりを作る第1歩になることを願いつつ、あいさつとさせていただきます。



第25回日本キャンプミーティング実行委員会
委員長 野口 和行

スケジュール

	会場①	会場②	会場③			
9:30	オープニング			9:30		
9:50	準備			9:50		
10:00	「すべての人に星空を 一星と人をつなぐ仕事ー」 高橋真理子（星つむぎの村）	「都道府県キャンプ協会の 取り組み事例報告会」 ・関東ブロック ・中部・北陸ブロック ・近畿ブロック ・中国・四国ブロック ・九州・沖縄ブロック	「子どもたちに「ライフジャケット」を！ ー思いはただ1つ… 子どもたちの命を守るこー」 森重裕二（子どもたちにライフジャケットを！）	10:00		
10:20						10:30
10:40						
11:00	「登山案内図に見る 富士登山」 大高康正（静岡県富士山 世界遺産センター）		「絵本をの話を通して考える 『おいしくカレーをつくる ポイント』」 蒲健吾（ラボ教育センター）	11:00		
11:20						11:30
11:40						
12:00 (45m)	自由時間（開放）			12:00 (45m)		
12:45	「キャンプ協会で頑張る 若手の集い」 万場るり子（兵庫県キャンプ協会） 落合美波（群馬県キャンプ協会） 川畑和也（鹿児島県キャンプ協会）	「オンラインや360度カメラを 使用したstayhomeでの 自然体験の検討」 石川大晃（アクトインディ 株式会社）		12:45		
13:15				研究発表(R-1)	13:05	
13:45	「なぜ、馬や自然は子どもの 育ちに良いのか？ ~ホースセラピーの現場から~」 黍原豊（三陸駒舎）	「レクで人気のじゃんけん ゲームで触れる、キャンプの 装備・安全！」 蒲健吾（ラボ教育センター）	実践発表(P-1)	13:45		
14:15				実践発表(P-2)	14:05	
14:45				実践発表(P-3)	14:25	
14:45 (30m)	自由時間（開放）			14:45 (30m)		
15:15 (105m)	シンポジウム「イマドキのキャンプ」 シンポジスト：根本 昌幸（コールマンジャパン株式会社） シンポジスト：寺中 祥吾（軽井沢風越学園） シンポジスト：竹川 将樹（株式会社ふもとっばら） シンポジスト：青木達也・江梨子（キャンプ民泊NONIWA） コーディネーター：佐藤冬果（東京家政学院大学）			15:15 (105m)		
17:00	クロージング			17:00		

【発表題目】

- R-1 日本キャンプ協会「キャンプ保険（国内旅行傷害保険）」の事故分析
○小西 岳勝（静岡県立朝霧野外活動センター） 太田 正義（常葉大学教育学部心理教育学科）
- R-2 アフターコロナのインバウンドキャンプ市場（中華圏）の可能性
○王聖慧（株式会社粉雪天堂）
- P-1 コロナ禍のキャンプ実習ーオンラインでやってみたー
○山根 真紀（日本福祉大学スポーツ科学部） 時安和行（至学館大学）
吉田理史（信州アウトドアプロジェクト） 上野朋子、藤井三弥子（愛知県キャンプ協会）
- P-2 自然学校と企業・メーカーとの連携に向けた取り組み
○徳田 真彦（大阪体育大学） 原田 順一（湘南自然学校）
- P-3 密を避けた野外炊飯（鉢輪炊飯）
○中島 宏（福岡県キャンプ協会）

シンポジウム

15:15-17:00

= イマドキのキャンプ =

昨年「おうちキャンプ」という言葉が流行したように「キャンプ」の形は多様化しています。日本キャンプ協会はこれまで、主に参加者の教育を目的とした「組織キャンプ」を中心に推進してきましたが、多様化する「キャンプ」に焦点を当て、理解を深めることで、さらに進化できるのではないかと考えています。

そこで、本シンポジウムでは多様な形で「キャンプ」に関わる方々に、イマドキなキャンプ事情をご紹介します。そして、多様な視点から見た「キャンプ」の「今」についての議論を通じて、それぞれのこれからの「キャンプ」の可能性について考える機会としたいと思います。

シンポジスト：根本 昌幸（コールマンジャパン株式会社 マーケティング・ディレクター）

1992年にコールマンに入社して以降、製品開発から広告/PR・プロモーションまであらゆるマーケティングやブランディングに携わり、コールマン・ブランドの成長を支える。

趣味はキャンプとバイク。日本各地のキャンプ場を1200ccの愛車と共に巡り、そのキャンプ数は年間40泊にもおよぶ。最近は1級小型船舶免許も取得し、釣りにも挑戦中。



～シンポジウムにおいてメッセージ～

「コールマンが見た日本キャンプ市場の変遷と今」

コールマンジャパンが日本での成長過程を商品展開の変遷をベースに検証し、コールマンが考える現在のキャンプ市場の特徴をご紹介します。

シンポジスト：竹川 将樹（株式会社ふもとつばら 代表取締役）

大学卒業後、家業を継ぎ自伐林家となる。2006年「株式会社ふもとつばら」を設立。2011年農林水産祭天皇杯受賞。造林・木材生産からキャンプ場・体験プログラムまで、受け継いだ森林資源を生かすとともに、地元地域とも連携し、山村地域の活性化にも従事。



～シンポジウムにおいてメッセージ～

キャンプ利用者の裾野が広がると共に増加する、自然にも不慣れなキャンプ初心者に対する「学び」の重要性をお話します。

シンポジスト：寺中 祥吾（軽井沢風越学園 副校長）

筑波大学大学院で野外運動を専攻。株式会社プロジェクトアドベンチャーに
入社し指導者養成や企業・学校団体の教育研修に取り組む。流通経済
大学助教を経て、開校と同時に軽井沢風越学園に参画。



～シンポジウムにおけるメッセージ～

2020年4月に開校した軽井沢風越学園は、幼稚園と義務教育学校
(小学校+中学校)からなる12年間の「混在校」です。2021年度から、
体育と重なる形で「アドベンチャー」というカリキュラムを始めました。
このカリキュラムをはじめたきっかけや、ここでの「キャンプ」が学校での学びとどう繋がるか、など
について話せたらと思います。

シンポジスト：青木達也・江梨子（キャンプ民泊 NONIWA オーナー）



2019年に日本初となるキャンプと民泊を組み合わせた『キャンプ民泊
NONIWA』を開業。【野あそび夫婦】というユニット名でアウトドア雑誌の監修
やキャンプ講習などもおこなう。他、キャンプ場のコンサルティング、商品開
発など幅広く活動。

～シンポジウムにおけるメッセージ～

キャンプ民泊 NONIWA では、これまで300組以上のキャンプデビューをお手
伝いしてきました。そのなかで“イマドキ”と感じる『参加者の多様性』と『ロ
ーカル×キャンプの可能性』についてお話したいと思います。

コーディネーター：佐藤冬果（東京家政学院大学 児童学科 助教）

小学2年生から毎年参加した組織キャンプでキャンプカウンセラーに憧れをもち、キャンプの道へ。
筑波大学大学院で野外教育を学び、修士、博士を取得したのち、2021年度より東京家政学院大学に着任。
野外教育関連授業や大学近隣の幼児を対象にした「森のようちえん」の運営を担当している。

～シンポジウムにおけるメッセージ～

コロナ禍と言われるようになり、「キャンプ」の語をニュースで耳にする機会が増えたように思います。
その内容は多様で、新しく知る「キャンプ」事情も多くありました。そのような中迎えた55周年の今回
は、多様なお立場で「キャンプ」に関わる方々がシンポジストとしてお集まりくださりました。イマドキ
と感じるキャンプの実際について情報提供頂くとともに、「キャンプ」の語を囲んだ語りを通して、その
場に集まるそれぞれにとっての「キャンプ」のこれからについて想いを巡らせる場になればと思います。



ワークショップ発表

午前：10:00-12:00 午後：12:45-14:45

＝ すべての人に星空を ―星と人をつなぐ仕事― ＝

高橋 真理子 (一般社団法人 星つむぎの村代表)

宙先(そらさき)案内人として、現代の科学がみせる宇宙像を、詩のように解説する。なかなか本物の星が見られない子どもたちやその家族に、星空を届ける。



【発表内容】

星空は、すべての生命にとっての共有の風景です。そんな星空がもつ力を感じてもらいつつ、星つむぎの村の活動のメインである「病院がプラネタリウム」から見えてくる世界を紹介します。

WS-1 10:00-11:00



【ご感想】

はじめてお会いする人たちがばかりでしたが、感動した、というコメントを何人かからいただき、大変ありがたかったです。

←発表の様子

＝ 子どもたちに「ライフジャケット」を！―思いはただ1つ…子どもたちの命を守ること― ＝

森重 裕二 (子どもたちにライジャケを！)

WS-3 10:30-11:00



「子どもたちにライジャケを！」代表。元小学校教諭、現在は庵治石細目「松原等石材店」3代目。「思いはただ1つ…子どもたちの命を守ること。」をコンセプトに、子どもの命を守る「ライフジャケット」のことを伝えるために日々活動中。

【発表内容】

リスクの高い水辺での活動で安全性を飛躍的に向上させる「ライフジャケット」について、なぜ準備することが必要なのか？ 管理者の責任は？ これからの「ライフジャケット」について、子どもたちとアウトドアで活動するみなさんに「ライフジャケット」を取り巻く現状をお伝えします。

※本ワークショップは30分間です



↑発表の様子

祝 MIP 賞受賞

= 登山案内図に見る富士登山 =

大高 康正 (静岡県富士山世界遺産センター 学芸課教授)

静岡県富士山世界遺産センター学芸課に勤務。専門分野は歴史学で、日本中世史、社会史を専攻。多くの人々を魅了してやまなかつた寺社参詣、聖地巡礼の世界を研究している。



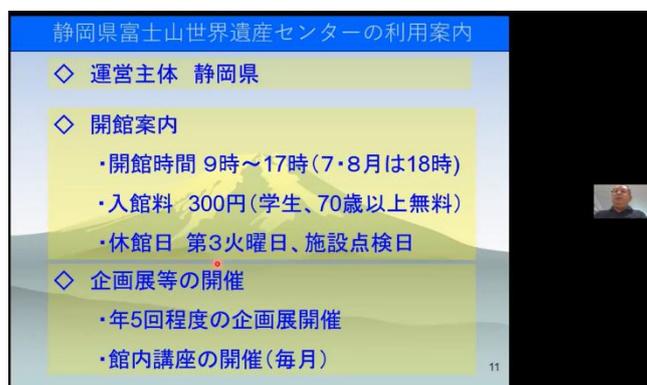
【発表内容】

江戸時代の人々の富士登山について、富士山かぐや姫ミュージアム所蔵の登山案内図「富士山禅定図」(ふじさんぜんじょうず)に描かれている登山道や、立ち寄り先などを解説することで、当時の人々の富士登山について追体験する機会としていただければと思います。

WS - 2 11:00-12:00

【ご感想】

オンラインで参加できることや、3会場を自由に行き来しながら好みのワークショップを聞くことができるなど、参加者にとっては参加しやすいプログラムだったのではないかと思います。個人的には自分のワークショッキングを担当している中で、Zoomで画面共有してスライドをもとに話をしていると、他の参加者の反応がわかりにくかった感がある。このあたり対面のワークショップであれば相手のリアクションをもとに次の展開を考えながら進められるので、オンラインの難しさを感じたところである。



↑発表の様子

実行委員企画

= キャンプ協会で頑張る若手の集い =

WS - 5 12:45-13:45

【発表内容】

日本キャンプ協会は、過去に「青年ミーティング」という事業を運営していました。そこでは、日本全国の若手キャンプ指導者、研究者が集い、親睦を深め、互いに刺激し合っていました。当時のように、若手が集い、キャンプについて、キャンプ協会について考え、話し合うような場を設けたいとの思いから、今回のワークショップが企画されました。

今回のワークショップでは、平成生まれでキャンプディレクター1級を取得している若手の3名からと共に、キャンプ協会のこれまでとこれからについて話し合いたいと思います。

万場 るり子 (兵庫県キャンプ協会理事)



4歳の時、家族でキャンプに行ったのが野外活動との出会い。小学～高校では子ども会のジュニアリーダーとしてキャンプやレクリエーションに携わる。大学時は、兵庫県立いえしま自然体験センターのキャンプリーター会に所属するとともに、自然学校のリーダーとしても活動。現在は兵庫県内の高校に勤務し、国語と中国語を担当する。兵庫県キャンプ協会には、20周年記念キャンプから参加し、運営委員を経て、数年前から理事を務める。

【ご感想】

まずは全国ミーティングで発言の機会を頂いたことに感謝しています。同年代とはいえ、経歴や活動エリアも大きく異なる3名でお話できたことで、キャンプと自分の関わり方について、一旦立ち止まって考えるよい機会になりました。更に、自然との触れ合いに加えて、人との繋がりが生まれることもキャンプの魅力であると再確認することができたと思います。また、視聴頂いた皆様にもお礼申し上げます。次はぜひ、画面ではなく、たき火なんかを挟んで、語らいの場が持てたら嬉しいです。

落合 美波 (群馬県キャンプ協会)

元公立小学校教諭(東京・群馬)、幼稚園での勤務経験有り。現在、平日は「ぐんま里山学校」のスタッフとして、不登校等の子ども達のサポート、週末や長期休みには、小学生を対象に、里山でキャンプを実施中。



【ご感想】

キャンプ協会について思うこととお話させていただきました。キャンプ協会についてこんなにじっくりと考え、話し合うのは初めてだったようにも思います。様々な課題に気づくと共に、協会を通してチャレンジしてみたいことも出てきました。ありがとうございました。

川畑 和也 (鹿児島県キャンプ協会)



1992(平成4)年鹿児島県鹿児島市生まれ。2017年キャンプディレクター1級取得。大学でレクリエーション・野外教育研究室に所属し、それ以来キャンプ協会の活動を中心に、子どもの自然体験活動、指導者養成などに取り組む。2015年より鹿児島県キャンプ協会事務局書記として、主催事業の企画・運営、広報誌・グッズの作成、HP・SNSの管理などを行う。九州キャンプミーティングにも事務局として携わる。

【ご感想】

今回キャンプ協会で頑張る若手の集いということで、コーディネーターの野口先生や初めてお会いする万場さん、落合さんとお話をする機会をいただき有難うございました。短い時間ではありましたが、それぞれ立場や背景が違う中でキャンプやキャンプ協会に対する思いや考えを共有でき、全国で活躍する皆さんに刺激を受けました。改めて今後の協会での活動や自分自身の活動について考える有意義な時間となりました。

キャンプに携わる者として、キャンプ協会に関わる若手としてできることは何なのか、まだまだ語り尽くせませんでした。これからもこのような繋がりを大切に、できることをコツコツと九州から頑張っていきたいと思っています。

= 絵本を通して考える「おいしくカレーをつくるポイント」 =

WS-4 11:00-12:00

蒲 健吾 (ラボ教育センター・東京都キャンプ協会)



課程認定団体であるラボ教育センター勤務。幼少の頃より英語での物語劇を主な活動とするラボ・パーティ主催のキャンプに参加。高校生ではグループのカウンセラーを経験し、大学4年間スタッフとして企画運営に携わる。現在は、中野区キャンプレクリエーション協会所属し、東京都キャンプ協会理事を務める。キャンプディレクター1級。

【発表内容】

世界の名作絵本「せかいいちおいしいスープ」をテーマに「おいしくカレーをつくるポイント」を参加者で考えるワークショップです。絵本のおはなしを知らなくても大丈夫、絵本の読み語りを聞いて、その感想をヒントにキャンプの定番カレー作りについて考えます。ワークショップをとおして指導者としての経験や知識、アイデアなどの交流をしましょう。

= レクで人気のじゃんけんゲームで触れる、キャンプの装備・安全！ =

蒲 健吾 (ラボ教育センター・東京都キャンプ協会)

【発表内容】

レクリエーションで人気の「すきやきじゃんけん」を「キャンプの装備」や「キャンプの安全」バージョンにアレンジ！ゲームをとおして、キャンプの装備にどんなものがあるのか、キャンプの安全を考えるとときに必要な視点はなにかなどの知識を整理していきます。

キャンプインストラクターテキストを普通に読むだけではつまらない、でも対面ではないから実際に触る時間も限られる。今後の講習会での実施に向けたチャレンジワークショップです。ぜひご協力ください。

WS-8 13:45-14:45

【発表の様子】

↓キャンプの装備・安全のワークショップ



↑絵本のワークショップ

= オンラインや 360 度カメラを使用した stayhome での自然体験の検討 =

石川 大晃 (アクトインディ株式会社/いこーよ四季冒険部ディレクター)

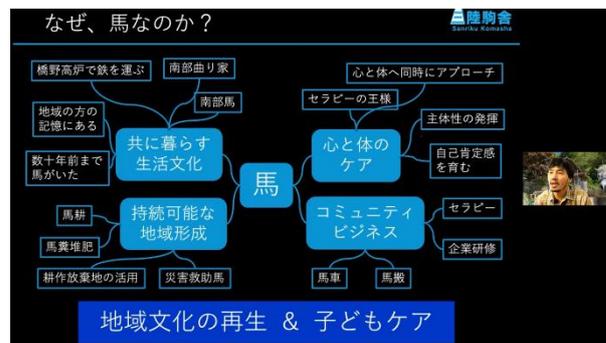
第 25 回キャンプミーティング実行委員。わくわく base 株式会社保育士。「子どもたちや次世代の可能性が広がる場を生み出し続ける」をスローガンに、いろいろな活動を展開する。



【発表内容】

昨年から新型コロナウイルス感染症の影響で、現地集合型の自然体験実施については、常に新型コロナウイルス感染症での社会情勢を検証し、状況によっては延期や中止の判断をせざるおえない状況が続いています。私達は、昨年からオンライン自然体験について試行錯誤してきました。本発表では、オンライン自然体験作りの動きの中での成功や失敗のエピソード、更に現在挑戦している 360 度カメラを使用した体験づくりについてお話できればと考えています

WS-7 12:45-13:45



= なぜ、馬や自然は子どもの育ちにいいのか？ ~ホースセラピーの現場から~ =

黍原 豊 (一般社団法人 三陸駒舎)

NPO や県立児童館を経て、東日本大震災後に釜石市に移り、復興まちづくりに携わる。被災地での継続的な子ども支援の必要性を感じ、馬の力に頼りながら子どもの心と身体を育むホースセラピーに取り組む三陸駒舎を 2015 年に設立する。



【発表内容】

現在、三陸駒舎には毎月延 200 名ほどの子どもたちが利用しています。発達障がいなど、でこぼこした発達の子どもの方が来ています。なぜ馬や自然は 7 つの感覚を育むのか等、現場から得られた知見を共有します。

WS-6 13:45-14:45

【ご感想】

今回の時間を通して、自然や馬の力と、子どもの身体や心の発達の関係について、ご関心を持っていただけただけのことをうれしく思います。不登校の子どもの受け入れについてのご質問をいただいたり、他のプログラムでも貧困世帯のキャンプ活動の事例報告があったりしました。

様々な困難を抱える子どもたちにキャンプや自然、馬は、生きる力を与えることができます。今後も、みなさんと一緒に学びを深めながら、自然や馬が、子どもの課題にお役に立つことが出来る場が広がることを願っています。

= 研究発表 =

日本キャンプ協会「キャンプ保険（国内旅行傷害保険）」の事故分析

小西 岳勝 （静岡県立朝霧野外活動センター）

R-1

アフターコロナのインバウンドキャンプ市場（中華圏）の可能性

王聖慧 （株式会社粉雪天堂）

R-2

= 実践(取り組み)発表 =

コロナ禍のキャンプ実習ーオンラインでやってみたー

山根 真紀 （日本福祉大学スポーツ科学部）

P-1

自然学校と企業・メーカーとの連携に向けた取り組み

徳田 真彦 （大阪体育大学）

P-2

密を避けた野外炊飯（鉢輪炊飯）

中島 宏 （福岡県キャンプ協会）

P-3

日本キャンプ協会「キャンプ保険（国内旅行傷害保険）」の事故分析

○小西 岳勝（静岡県立朝霧野外活動センター）、太田 正義（常葉大学教育学部）

1. 緒言

公益社団法人日本キャンプ協会では、1999年から協会に登録している指導者がキャンプを実施する際に割安な掛け金で加入できる「キャンプ保険（国内旅行傷害保険）」、「デイプログラム保険（レクリエーション保険）」を用意している。本研究では、「キャンプ保険」の1999年4月から2016年3月までの17年間に保険金請求があった怪我や事故概要の分析を行う。野外活動の事故事例の分析やヒヤリハットの分析は、青木ら¹⁾による青少年教育施設における事故事例の収集・分析、国立オリンピック記念青少年総合センター²⁾による全国的な野外活動のけが・病気の発生状況に関する研究、傷害保険を対象とした事故分析はボーイスカウト日本連盟による「そなえよつねに共済」の事故データ分析³⁾が行われている。本研究は事故分析を通じて安全管理の基礎資料を得ることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 対象

1999年4月から2016年3月までに日本キャンプ協会キャンプ保険に保険金請求があり、事故データが得られた299件の事故を対象とした。なお年度別の加入者総数は得られているもののそれらの属性の情報は得られなかった。

2.2 事故データの分類・集計

キャンプ保険の保険金支払いに際しては以下の情報が取得された。「事故日」、「受傷者情報（年齢・性別）」、「事故状況（記述）」、「通院・入院日数」、「支払い保険金額」。なお「事故状況（記述）」の情報だけでは、データの分析が困難であり、得られた記述をもとに以下に分類・集計をした。「発生場所」、「プログラム」、「事故の要因」、「傷病の種類」、「受傷部位」。なお、記述から判断が困難なものほどの項目も「不明」として処理した

2.3 事故データの分析

事故発生状況の経年変化を把握するため、17年間の加入者数と事故発生率の、また季節別の傾向を把握するため事故件数と発生率のクロス集計をそれぞれ行った。次に事故データを基に、性別と年齢層、

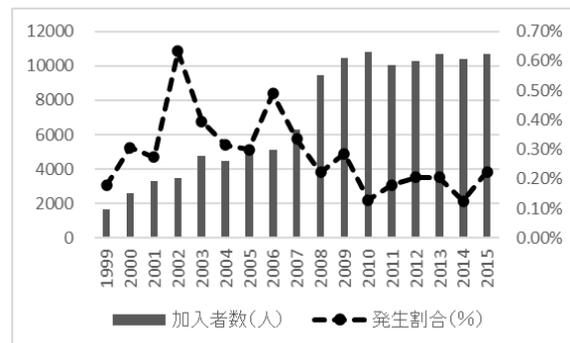
プログラムのクロス集計を行った。また、保険金支払い金額が高くなる重傷となった事故は、どのようなプログラムや事故の要因が影響しているのか検討した。

3 結果と考察

3.1 キャンプ保険の加入者推移と事故発生割合

17年間の加入者は2007年まで6000人程度だったが、2008年以降10000人を超えるようになった（表1）。保険請求件数の発生割合は、平均0.25%であるが、2002年度の0.63%が最大であり、2006年度に0.49%の発生があるものの、長期的には減少傾向が続いている。

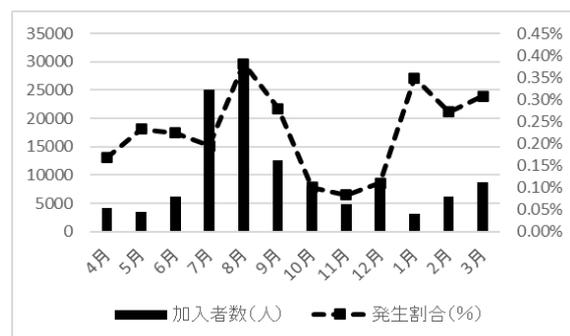
表1 年度別加入者数と事故発生割合



3.2 月別の加入者数と事故の発生割合

加入者数は7～9月の夏季で半数を超える。しかし12月、3月の申し込みもあり、学校などの長期休みに多くの事業が実施されているためと考えられる（表2）。また8月は事故の件数、発生割合とも多いが、1～3月の件数は少ないものの、事故発生割合が高くなっている。冬季はスキー、スケートなど雪上、氷上活動が増え、事故が増加する傾向だと考えられる。

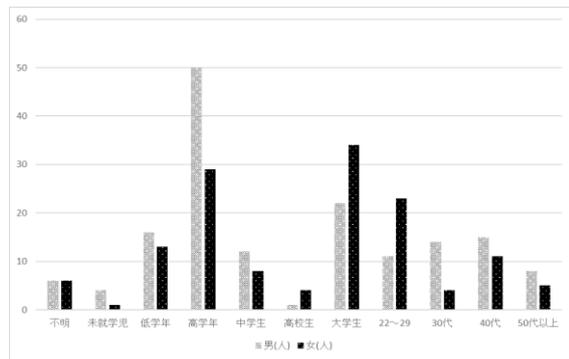
表2 月別加入者数と事故発生割合



3.3 性別と年代別にみた事故の発生件数

男女の事故発生状況に大きな差は見られなかったが(表3)、性別と年齢を比較したところ、小学校高学年では男性に事故発生件数が多く、大学生から20歳代の女性は男性に比べて事故発生件数が多かった。

表3 性別にみた事故発生状況



これらの事故件数の性差は保険加入者数が当初より差があったためなのか、それとも事故発生率に性差が生じるのかは判断が困難である。なお、大学生から20代の女性は男性に比べ転倒による事故が多く発生した。

3.4 事故の要因の発生件数と保険金支払額

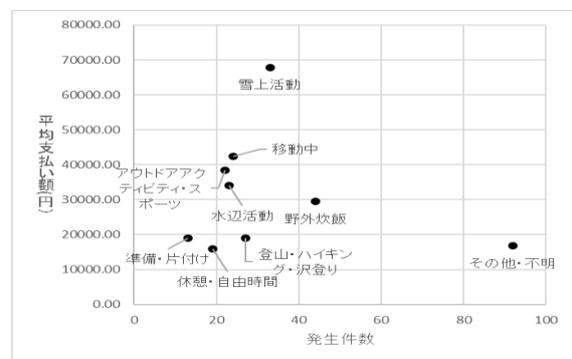
事故の要因別に発生件数を分類すると上位5項目は、転倒(127件)、虫・動物(64件)、物や人が当たる、ぶつかる(33件)、刃物(25件)、熱源(20件)であった。おおむね事故の発生要因は先行研究と一致している。転倒による事故は捻挫や打撲による軽傷ですんだ事故から、骨折、脱臼など重傷で入院する事例も多く見られた。虫・動物による事故は虫刺されによる通院が1~2日の軽傷が多い。重傷の事例は少ないものの、マムシなど蛇に噛まれ入院する事例もあった。

3.5 プログラム別に見た重傷度と支払い額の特徴

事故の発生は、野外炊飯(44件)、雪上活動(34件)、登山・ハイキング・沢登り(27件)、移動中(24件)、水辺活動(23件)の順に多かった。野外炊飯では、鉋、包丁など刃物によるけが、熱せられた鍋などを触るやけどが発生した。刃物によるけがでは鉋の使用では重傷化しやすく、反対に包丁によるけがは軽傷で済んでいる。また、やけどでは熱せられた鍋の取手を触る程度の軽傷なものから、熱湯に触るなどの広範囲に触れるもの、目に火の粉が入るなど重傷化するけがも発生している。

また、支払額の平均金額をプログラム別に分析したところ、支払額の平均額は、29,483円だった。平均額を超えたプログラムは、雪上活動(67,862円)、移動中(42,434円)、アウトドアアクティビティ・スポーツ(38,363円)、水辺活動(34,105円)、野外炊飯(29,488円)である。なかでも雪上活動は3スキー・スノーボード、そり滑りなどによる事故が発生しており、軽度の捻挫などもあるが、骨折を伴う重傷化する事故が発生している。なお、そり滑りによる転倒事故で骨折を伴う大けがが発生し後遺症も含め300万円が支払われているが、この事故は突出して支払い額が多いため、支払額の平均金額から除外した。

表4 プログラム別にみた平均支払い額



4 結論と課題

本研究ではキャンプ保険における事故の概要を把握することはできたが、事故データの詳細な分析は、加入者の総数や加入者の属性(指導者か参加者)、事故時の活動プログラムの詳細や発生時間などが不明であり困難であった。今後は、保険請求時の聞き取り情報のより詳細な定型化が必要である。また本研究は2015年度末までの情報であり、2016年度以降の事故分析も今後続けていく予定である。

引用文献

- 1) 青木康太郎、小林祥之 青少年教育施設における危険度の高い活動・生活行動の現況と安全対策に関する一考察 キャンプ研究、24、25-36、2021
- 2) 国立オリンピック記念青少年総合センター調査連絡会 小・中学生のキャンプ中のけが・病気の発生状況に関する研究 1999、55-62
- 3) 公益財団法人日本ボーイスカウト連盟、野外活動のための安全・安心講座、2020、46-63

インバウンドキャンプ市場（中国）の可能性

○王聖慧 （株）粉雪天堂、（株）クロスプロジェクトグループ

キャンプ事業に参入するまでは中国語スキースクールや中華圏向けの日本スキー場ポータルサイトの運営など、私は中華圏のインバウンドスキーを中心に事業を行っていた。冬の事業がメインであったため、オールシーズン運営を目指してキャンプ事業を視野に入れ、（株）クロスプロジェクトグループにてキャンプ事業のノウハウを学ばせて頂いた。コロナでインバウンド市場全体がほぼゼロに近い状況であるが、アフターコロナのインバウンド市場（中国）の可能性を感じ、調査した現段階の情報と愚見を述べさせて頂く。

コロナの影響で日本国内の旅行業、宿泊業は不調が続く中、キャンプ関連事業が好調である。コロナで外出制限されるのは日本だけではなく、アジアの中華圏でも同じ状況である。中国でも台湾でもキャンプ場（グランピングも含め）ビジネスは今までにない勢いで市場が伸びている。例えば中国のECサイトの大手ティーモール（天猫）ではキャンプ関連用品の売上が二年連続倍増し、一般のアウトドア用品が二桁の増加率より遥かに超えている。中国のロコミアプリ「小紅書」では2021年1月から5月までのキャンプ（露営）検索数が前年比428%である。様々のメディアやイベントでキャンプに関する露出が増えている中、中国のキャンプ市場はどんな現状であるか、キャンパー属性、キャンプ場、キャンプ用品ブランドなどの角度から基本情報の調査を行っていた。

2020年は中国の「キャンプ元年」である。日本と違い、中国のキャンプ市場ではまだまだ途上であり、業界がスタートしたばかりの段階である。キャンプ人口が正確な統計データがほとんどなく、業界の動向がどうなっているか、業界団体も民間企業も模索しながら業界を作っていく状況である。一方、コロナの影響で追い風に乗っているキャンプ業界はやっと「キャンプ元年」を迎え、今後の可能性にも期待できると言えるであろう。業界の若さと同じように実はキャンパーの年齢層も20代と30代がメイン

であり、新しいライフスタイルと新しい体験を求める傾向が強いと見られる。例えば焚き火をじっくり見て楽しんだり、自然の静かさを楽しんだりするより、賑やかさを好むユーザーが多いである。その代表的な事例はキャンプとフリーマーケットとのコラボレーションである。キャンパーたちはキャンプしに来ると同時に自慢の手作り商品を販売したり他のキャンパーの作ったカクテルを飲んだり賑やかなキャンプライフを過ごしている。



キャンプ場が不足している。人口が14億人である中国ではキャンプ場の数はまだ少なく、上海近辺では施設として完備しているキャンプ場は十箇所もないほどハード施設の建設が不足している。この背景には市場の未熟や土地問題や建設ノウハウなど様々な要因がある。業界初期ではキャンプ場の数が少ないことはどの国も同じである。しかし、土地問題は日本と違い、行政が経営するキャンプ場がなく、民間企業が事業用地の取得にかなり難易度が高かったり、そもそも土地の私有化ができなかったりキャンプ場建設の一番の難関である。そしてキャンプ場建設のノウハウが少ないため、どこからスタートするか、どこに注意すべきかなどノウハウが欠けている。

キャンプ用品の売れ筋が良く、今後も伸び続ける

であろう。中国国産のブランドで上場企業のモビガーデンをはじめ、ベルテント代表のノルディスク、日本のスノーピークやキャプテンスタグを含め、世界各国のブランドが今中国マーケットに進出している。欧州最大のスポーツ見本市と言われているISPO（イスポ）は2021年7月上海で開催し、初めて中国キャンプ市場についてのフォーラムを行い、業界の成長に大いに期待できると見られる。

このように中国のキャンプ市場が急成長している中、アフターコロナのインバウンド市場では中国の旅行者は日本でキャンプする可能性があるのだろうか。それに伴い、どんなビジネスチャンスがあるか、どんな課題があるだろう。

まず日本でキャンプする可能性が非常に高いと考える。中国国内のキャンプ場施設が不足で、日本ではフルレンタル商品を提供すればいつものホテル泊ではなくキャンプすることが非日常体験となり、一般客からキャンパーまで幅広く販売できる。また、旅行者の動向としてはモノ消費からコト消費に変わり続ける。北海道のパウダースキーを楽しんだりバランスバイクのストライダー大会に参加したり今までにはない旅行のスタイルが増えている。その中ではキャンプすることは宿泊の一択だったり、一つの体験商品となったりする。平日の稼働率を上げることや、フルレンタルの高単価プランの販売数を増やすなど日本国内市場では難航だった課題の打開策の一つになるのではないかと考える。

そこで、今現状のキャンプ場でインバウンドの中国客を迎えるならどんな課題があるだろう。まずは言語だと思われがちだが、一番の課題は商品だと考える。言語問題はアルバイトの通訳を雇用するか翻訳機を使えばなんとかなる課題で、根本的な商品が違うことを大前提としてある。今まで日本で販売しているキャンプ場使用料やレンタルセットなどの商品をそのまま販売すると売れないであろう。海外から来るお客様は車で来ることもなく、キャンプ用具から小物まで何も持っていない状態で来ていることを想像すれば通常のフルセットでは物足りないことに気づく。そして、商品がある程度完成する

と、今度どうやって商品を中国のお客様に知って頂くか、宣伝活動はもう一つ課題である。最後にお客様が本当にキャンプ場に来たら、その対応に既存のスタッフが対応できないケースがほとんどである。通訳の雇用を増やすべきか翻訳機で対応するか様々な運営上の課題が出てくる。

課題が山ほどあるが、そもそも既存のキャンプ場はインバウンドを狙うべきかどうかまず自己診断が必要かと考える。交通のアクセスが一番のポイントだと考える。ほとんどのオートキャンプ場はマイカーで来ることが前提であり、公共交通機関（自社シャトルバスも含む）で来られるかどうか、海外のお客様にとっては重要である。また高速からの距離ではなく、空港からの移動距離が海外客の基準である。そしてキャンプ場近辺では有名な観光スポットがあれば非常に集客しやすく、逆にキャンプという体験しかないエリアでは独特のキャンプ商品を生み出す必要がある。またキャンプ場ではフリーWi-Fiがあるかどうか、日本のお客様には絶対必要でないものが海外客にとっては絶対必要である。

以上、中国のインバウンドキャンプについて基本中の基本情報であるが、今後のアフターコロナでは中国に限らず、グローバルのお客様が日本のキャンプ場に足を運ぶことが増えると予測する中、どこの国のどんなお客様にどんな商品を提供するか、いろいろ可能性があると思われる。日本国内市場では好調ではあるが、プラスアルファの選択肢としてアフターコロナのインバウンドを今から準備できるときと新しい道が拓いていくのではないかと考える。

2020夏コロナ禍の大学キャンプ実習－オンラインでやってみた－

○山根真紀（日本福祉大学）、藤井三弥子（愛知県キャンプ協会）、時安和行（至学館大学）、吉田理史（信州アウトドアプロジェクト）、上野朋子（大東文化大学非常勤）

【はじめに】

8月末に実施予定だったキャンプ実習は、新型コロナウイルス感染拡大の影響でオンライン開催となった。ギリギリまで対面実施を追求したが、学生の安全・安心を最優先し、大学側の方針に従うこととなった。

オンライン実施にあたり、①本来の実習の目的をどのように達成するか、②そのためのプログラム作成では、オンラインならではの利点をうまく使うこと、全体、グループ、個人の活動をバランスよく取り入れること、個人で考えたり、工夫したりといった場面を取り入れることなどを考慮した。③さらに何よりも、キャンプに行ってみたく思えるような

内容にすることを心がけた。その結果学生からは、「画面越しではあったが、キャンプのアクティビティに触れ、仲間との交流が深まり、つまらないと思っていた実習が楽しかった」という感想が多く得られた。

今回の発表では、実施したプログラムの詳細とそれに対する学生の振り返りを通して、コロナ禍のキャンプ実習、知恵と工夫と協力で、活路を拓いた一例として報告したい。

【実習概要】

キャンプ実習は日本福祉大学スポーツ科学部の

表1. キャンプ実習プログラム（ZOOMによるオンライン実習）

限	8/29（土）	8/30（日）	8/31（月）	9/1（火）
1 9:20～	オリエンテーション スタッフ紹介 GW（BOS※1）自己紹介	（実習） 森のレストラン 全体⇒個人	（ライブ） 山歩き トレイルラン	（グループ） ふりかえり GW
2 11:00～ 12:30	（実習） アイスブレイク、イニシア チブゲーム 全体⇒GW	（グループ） 森のレストラン GW：グループ内発表 GW⇒全体共有	（ライブ） 薪わりと火おこし	全体発表会 全体共有
3 13:25～ 14:55	（講義） キャンプと安全 いくつかのアクティビティ を例に	（ライブ） テント設営	（講義） キャンプのアクティビ ティ 楽しみ方とその工夫 集いの演出（キャンプ ファイヤー・キャンド ルサービス）	まとめ（個人） レポート作成
4 15:05～ 16:35	（講義、グループ） キャンプと環境教育－地球 に、自然に優しいキャン プのために 全体⇒GW⇒全体共有	（ライブ・実習） ロープワーク	（講義、グループ） キャンプの企画 「やってみたくキャン プ」 全体⇒GW⇒共有	
課題	1日のふりかえりをスタディ（※2）に提出（400字程度） 本日の内容をふりかえり、自分自身やグループの取り組み、講義やグループワークで感じたことやかかんがえたことを記載する			

※1 GW（グループワーク）はブレイクアウトセッション（BOS）で、班ごとに分かれて活動

※2 スタディ：本学の授業用ポータルサイトで、学生はレポート提出や資料のダウンロードができる

専門実技『野外運動A』として実施され、野外運動B（スキー実習）、野外運動C（水辺実習）を含め、卒業までにいずれかの種目を履修しなければならない選択必修科目である。対象は1年生、例年信州高遠青少年自然の家で3泊4日の日程で実施していた。

2020年度は8月29日（土）～9月1日（火）の4日間ZOOMによるオンライン授業とし、履修学生は80名（男子64名、女子16名）であった。プログラムを表1に示した。スタッフは8名（非常勤講師4名、本学教員4名）であった。学生は10名で1班の8班編成とし、グループワーク（GW）はZOOMの機能であるブレイクアウトセッション（BOS）を用い、各班にファシリテーターとしてスタッフを1名配置した。

オンライン授業実施上の注意点として、学生にはZOOM入室後表示される名前を《○班 □□△△》に変更させ、全体の授業中はミュート、ビデオのON/OFFは自由とさせた。ただしGWでは、ビデオはONとし（原則）、マイクはミュート、発言する際に解除するよう事前に周知した。

【プログラム】

実施したプログラムの詳細について、講義、実習、ライブ配信、に分けて説明する。

1) 講義

『キャンプと安全』では、野外炊事を中心にリスク要因と対策、指導者の役割と指導のポイントについて解説した。『キャンプと環境教育—地球に、自然に優しいキャンプのために—』では、実際に起きているキャンプでの環境汚染や破壊に触れ、キャンプを行う上で配慮すべきこと、持つべき意識、それを日常にどのように生かすかについて講義した。

3日目には、授業の学びをもとに『やってみようキャンプ』を学生に企画させた。『企画の前に考えること』や『キャンプのアクティビティ』を紹介した後、企画に必要な要素について講義した。

各講義終了後はGWを実施し、それぞれのテーマに基づいて意見交換を行い、代表者による発表を行い全体で共有した。

2) 実習

見たり聴いたりするだけでなく、学生が実際に活動する場面を、オンラインでも取り入れた。

まず『アイスブレイク』では、スタッフを中心にジャンケンゲーム、リズムゲームなどで、学生の反応を引き出し、緊張感を取り除いていった。その後

のGWではグループ内で自己紹介や共通点探しなどを行い、コミュニケーションを深めた。

『森のレストラン』では、自宅周辺で自然素材を採取し、料理に見立てたひと皿を作成させた。その後コンテスト形式で発表会を行い、優秀作品を選出した。身近な自然に目を向ける機会となった。

3) ライブ配信

長野県戸隠キャンプ場からライブ配信を行った。ポケットWi-Fi、ビデオカメラ、マイク等の機材準備が必要だったが、ライブ感が伝わり学生の満足度も高かった。実施した活動は、『テント設営』『ロープワーク』『山歩き』『トレイルラン』『薪わりと火おこし』である。大学側から補足説明を加えたり、キャンプ場の様子を伝えたりと、さながらTV中継風で充実していたのではないかと自負している。

【学生のレポートから】

授業のまとめとして提出させたレポート72名分から、学生の感想を一部報告する。

まず、キャンプ実習が対面からオンラインに変更になったことよって、「参加することに不安、つまらなそう、緊張する、対面ができなくて残念だ」といったネガティブな感想が49名（68.0%）に見られた。しかし、実際に実習に参加したことで、「コミュニケーションがとれた、話せるようになった、仲が深まったなど」33名（45.8%）、「楽しかった、充実していた、良かったなど」31名（43.0%）、「キャンプに行きたくなくなった」13名（18.0%）、「協調性や自主性が高まった、班で協力できた」12名（16.7%）といったポジティブな記述が多く見られた（複数回答）。

BOSによるGWについては、「回を重ねるごとに発言が増えた、意見が言えるようになった、話すことに抵抗がなくなった」と、GWの質的な向上を認識する学生がいる一方で、「あまり意見を出せなかった、意見が少なくまとめるのに苦労した、話し合いに参加しない学生がいた」とGW運営の困難さに関する記述も認められた。

【まとめ】

今回のオンラインキャンプ実習、プログラムの内容が質・量ともにバランスよく、ライブ配信は現地にいるような臨場感が体験でき、効果的であった。学生にとって初期のGWは困難な課題の一つで、ファシリテーターの役割が重要であることが明らかとなった。

自然学校と企業・メーカーとの連携に向けた取り組み

○徳田真彦（大阪体育大学）、原田順一（NPO法人湘南自然学校）

1. はじめに

現在、30代を中心とした民間の自然学校職員や大学教員が集まり、より良い自然体験活動の未来を創っていくために、勉強会やオンラインサロンを実施している。その中で、勉強をするだけの集まりではなく、行動をしていく仲間であるという信念から、7つのプロジェクトが進められている。

①政策提言

②自然学校と企業との連携

③社会提案型企業連携

④研究提言

⑤青少年教育施設改革

⑥出版

⑦募金

本発表では、自然学校と企業との連携および研究提言プロジェクトが共同して取り組んでいる取り組みについて、紹介したい。

2. 連携プロジェクトについて

矢野経済研究所調査によると、2020年の国内のアウトドア市場規模(用品、施設、サービスの合計)は、4895億円(予想)となっている。コロナの影響で2019年の5169億円から約270億円減と予想されているが、キャンプを含むライトアウトドア市場は微減にとどまっており、マイナス基調は新型コロナウイルス感染症による一時的なもので、アウトドア市場全体では、今後数年は増加基調が続くと予想されている。今日の市場の盛り上がりは誰もが感じているが、その盛り上がりは自然学校や野外教育の業界にまで及んでいるかという、そうとは言えない現状があるだろう。アウトドアメーカーをはじめとする様々な企業は、自然学校の存在は認知しつつも、業界に対する理解や関心が少ないように感じている。マーケティングアドバイザーの加藤龍氏(元日本ゴア社)によると、企業はビジネス効率を求める傾向があり、結果が見えやすい事業や対象に対して結び付くことが多く、自然学校との連携には必然的に時間をかけて取り組んでいくことになるため、連携しづらい側面があることを指摘している。しかし、これから

の時代は、SDGsをはじめ環境や教育を取り巻く課題に対して企業も取り組んでいくことを求められていることから、これまでの状況とは変わっていくのではないかと述べている。

一方で、2011年3月に発行された「2010年自然学校全国調査報告書」によると、全国に3696校の自然学校がある事が示されており、11年経った現在も大きな変動はないのではないかとと思われる。全国でこれほどの自然学校がある中で、そこに関わる指導者やボランティアリーダー、参加者、保護者は相当数に及ぶものと容易に想像できる。自然学校で行われるキャンプ事業では、当然アウトドア活動を行うために必要なウェア、ギア等を使用しており、ここには大きな市場があるものと考えられる。

しかしながら、自然学校の種別や、指導者・参加者特性、指導者や参加者がどのようなアウトドアウェアやギアを使っているのか、必要としているのかといった、具体的なデータは「2010年自然学校全国調査報告書」以降、見当たらない。このようなデータは、自然学校の活動を説明するものとして必要なものであり、企業側に市場を根拠づけるものとしても重要な役割を担うだろう。また、何より現状を知ることが、自然学校の課題の把握や今後の発展する方向性を考える上で非常に重要なデータとなり得る。

以上のような課題をクリアするために、2021年6月より、「アウトドアメーカーをはじめとする企業の自然学校への認知度向上」を目的に、自然学校と共同してプロジェクトを立ち上げた。現在は、プロジェクトの最初のステップとして、「実態調査」に取り組んでおり、具体的には、以下の点を明らかにすることを検討している。

①自然学校の実態調査

- 1) 自然学校で行われている活動、活動に必要な装備、備品(施設保有の装備・備品含む)
- 2) 自然学校の活動への参加者の特性(数、年齢層、男女比など)
- 3) 自然学校の指導者(職員)の特性(数、年齢層、男女比など)

②自然学校の参加者、指導者のギア、ウェアの実態調査

- 1) 参加者に必要なギア、ウェアの特性(価格、機能性、デザイン性など)
- 2) 参加者および保護者のニーズの把握
- 3) 指導者(職員)に必要なギア、ウェアの特性(価格、機能性、デザイン性など)
- 4) 指導者(職員)のニーズの把握

3.パイロット調査

プロジェクトの遂行にあたって、まずは小さなモデルケースを創ることを目標とし、A自然学校に協力頂き、参加者のギア、ウェアの実態を明らかにすることを目的にパイロット調査を実施した。調査期間は2021年7月23日～2021年8月31日とし、調査対象は2021年度にA自然学校のキャンプ事業に子どもを参加させた保護者であった。調査内容は、①保護者・参加者の特性(性別、学校段階、日常生活でのキャンプ活動の日数、キャンプ事業に参加させている理由)、②キャンプウェアに関する調査(ウェアを選ぶ際に重要視すること、ウェアに関する要望や困っていること)、③キャンプギアに関する調査(用意するのに苦労するもの、ギアに関する要望や困っていること)の3つであった。

現在データを分析中であるが、49名の保護者から得られたウェアおよびギアに関する質問の集計結果をいくつか紹介したい。

「キャンプに参加させる際のウェア(服)で、下記事項(価格が安い、機能性、ファッション性、ブランド名、日常でも使える汎用性)をどの程度重要視しますか」という質問を「かなりする、する、あまりしない、しない」の4段階で回答を求めた結果、機能性および日常でも使える汎用性の2項目については、かなりする、すると答えた割合は85%を超える結果となった。また、その他重要視することを自由記述で求めた結果、「サイズ調整ができること」、「長く使える事」、「耐久性」などが挙げられ、保護者は子どもをキャンプ事業に参加させる際に用意するウェアとして、「日常的に長く使えるもの」を求めていることが考えられる。その他、「名前欄が大きいと良い」といった保護者ならではのコメントもあった。

「キャンプに参加させる際に用意するギア(道具)

で苦労するものはありますか」という質問をA自然学校で用意するギアを記載し、回答してもらった結果、「雨具(30%)」、「服(20%)」、「ラッシュガード(20%)」を用意するのに苦労していると回答し、衣類に関して約70%の割合が苦労していると回答する結果となった。その理由として、「使う頻度が低い割には、アウトドアブランドの高機能レインウェアは価格が高めなこと」、「来年には成長して使えなくなるので、高価なものを選びにくい」、「ちゃんとしたキャンプに参加させたことが無いので、どれくらいの価格のものや、メーカーを選ぶのがいいのか、わからない」といった理由が挙げられた。前述した、日常的に長く使えるものを重要視するという結果と共通していると考えられる。また、「レンタルしてほしい」「おすすめ商品の紹介してほしい」「通販サイトの紹介してほしい」などの記載が見られた。

今後詳細に分析をしていく必要があるが、自然学校のキャンプ事業に関わるウェアやギアに関するニーズや要望の傾向を見て取ることができた。この調査結果は、企業だけでなく、自然学校の運営等にも役立つデータとなり得る。今後、キャンプリーダーや職員への調査なども進めていきたい。

4.さいごに

このプロジェクトは、参加者がアウトドア活動をさらに楽しめるようになること、指導者はより高度な教育を行えるようになること、企業のブランディングやウェアやギアの機能性向上につながることで、地域の活性化に寄与することといった「参加者」、「指導者」、「企業」、「地域」がより良く連携し、明るい未来を創っていくことを目指している。そのためには、実践と研究を融合させながら進めていくことが必要不可欠であり、手探りではあるが、より良い融合を目指して進めていきたい。

参考引用

- 1) 株式会社矢野経済研究所:「アウトドア市場に関する調査2020」.
- 2) 走林社中,第3回円形劇場「アウトドアメーカーとの連携について～地域・社会への貢献を考える～」.2021.6.17.加藤龍氏パーソナルコメント.
- 3) 2010年自然学校全国調査報告書:公益社団法人日本環境教育フォーラム,2011.3.

密を避けた野外炊飯(鉢輪炊飯)

○中島 宏(福岡県キャンプ協会)

1. はじめに

学校で行う宿泊体験の野外調理実習は家庭科の授業の延長線で、全員で分担して調理実習を行うケースをよく見かけます。「あなたは薪係」「あなたは炊飯係」「そしてカレー係」等。そのため、野外調理場は過密状態に陥ります。そして自分の担当した過程しか体験していません。そこでコロナ禍で福岡市内の小学校A・福岡市B公民館で行った野外調理実習を紹介したいと思います。

また 福岡市野外活動センターで行っている「防災キャンプ」も同様のプログラムを進行しているので合わせて紹介します。

【基本的考え】(自分のご飯は自分で炊く)

自分のかまど作り	5号鉢の植木鉢
自分の食する米の量	牛乳パック3cm
炊くための燃料・火加減	輪切り牛乳パック40分
自分の炊飯具兼食器	100均の土鍋
密にならない場所	風向きと高さを考える

2. 当日の流れ

2-1. オリエンテーション

災害時のことも考えて避難所では「火」は焚けません。自宅避難ということで家にある植木鉢でかまどを作ります。燃料は牛乳パックを輪切りにして使います。ガスが止まってもご飯が炊けます。ガスが出るなら一度土鍋でご飯を炊いてみましょう。停電になっても大丈夫です。

2-2. 土鍋(お米を研いで浸水時間)

牛乳パックを3センチで切った容器。これには150cc(お米120g)が入ります。自分が1食どれくらいを食べるのかを考えてみましょう。そして30分浸水。一度水を捨てて改めて150ccの水を差します。第2関節という迷信は使用しない。

2-3. 鉢輪製作(約30分)

素鉢の5号鉢を使用します。穴を開ける場所を鉛筆や釘などで線を描いて穴あけ開始です。釘と小さ

な金槌を使って開けていきます。この工程は以前から「鉢ランタン」の製作で説明します。穴が空いたらいよいよ炊飯です。ペグを2本貫って燃やす場所を探します。

2-4. 炊飯開始(約40分)

牛乳パックは事前に2センチ前後の幅で輪切りにして用意しています。給食の牛乳パックを貯めておいてもかまいません。焚きつけには麻ひもを5cm配っています。1パックの牛乳パック3個で、10分強で炊きあがります。子どもは4~5個必要だと思います。炊きあがりは泡が出なくなるのと土鍋の二の穴から香ばしい香りがしてきます。あとは蒸らしです。

周囲の清掃と後片付けをしましょう。牛乳パックは完全燃焼して「灰」はほとんど出ませんし煙も出ません。

2-5. 食卓じゅんぴ(副食配布)(10)

早く炊きあがった人から班で食べる場所の設定をします。鉢輪炊飯は自分の食べるご飯作りですから、副食は本部で作ります。学校では給食のおかずが用意されますし、防災キャンプでは井物(中華井、すき焼き井)を用意して土鍋のご飯にかけます。

カレーは人参やジャガイモを煮るのに時間がかかるので火力の少ない献立をと考えます。

2-6. 食事・後片付け(30)

黙食で行います。自分作った鉢輪とご飯を炊いた土鍋は持ち帰ります。小学校の場合洗い場が密になるので土鍋は袋に入れて持ち帰ってから洗うようにします。

2-7. 振り返り

省略します。

3. その他付随のプログラム

公民館ではこれプラスカトラリーづくりをしています。学校では新聞紙を用いた「シータポン」を作ってそこに座ったりしています。

第25回日本キャンプミーティング ルーム移動マニュアル

【第25回日本キャンプミーティング開催要領】

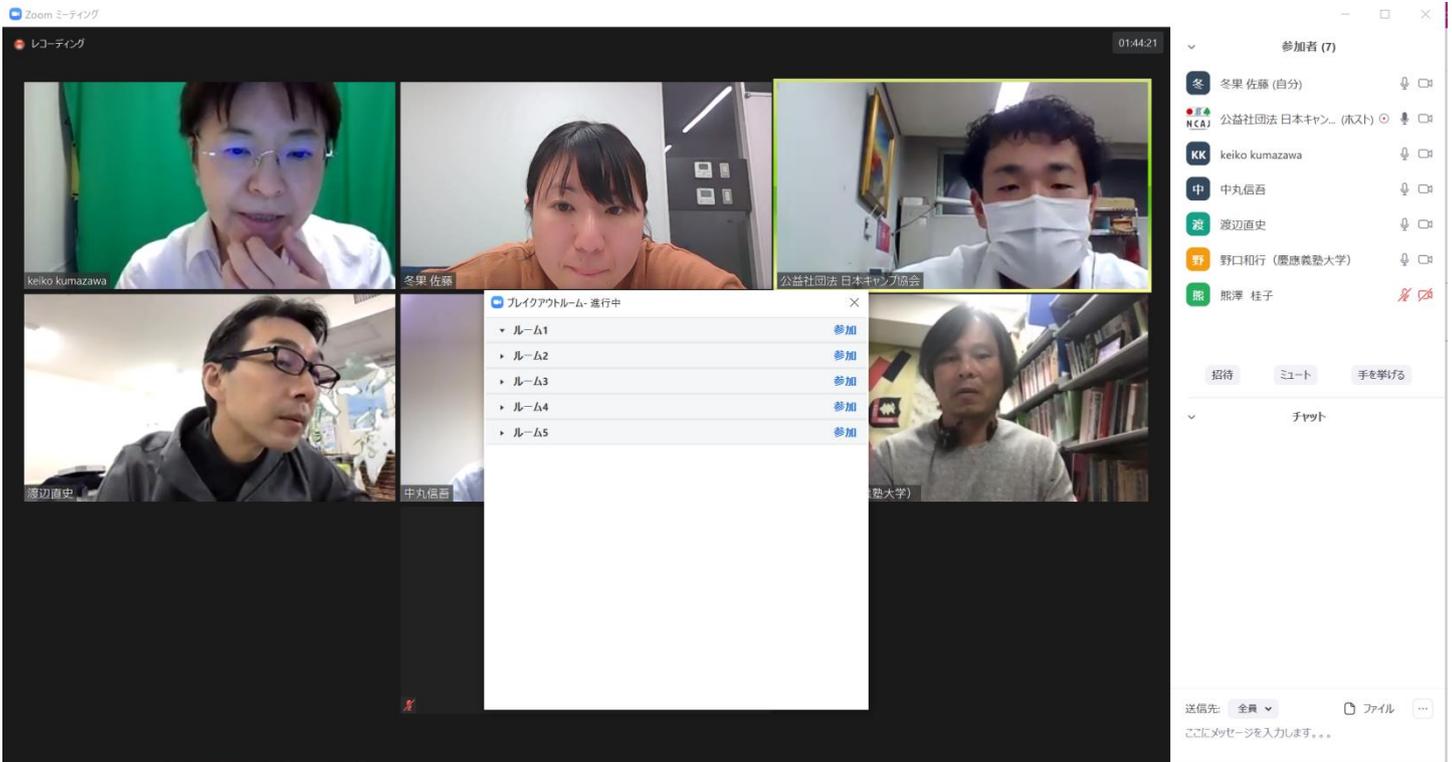
- ・ 午前の部、午後の部では、3つのルームに分かれ、ワークショップ・研究発表・実践(取り組み)発表が行われます。
- ・ お好きな題目をご覧いただくためには、ブレイクアウトの操作が必要です。

【重要：アップデートの確認】

- ・ ZoomをPCにインストール(ダウンロード)したのが2020年9月24日以前で、その後1度もアップデートを行っていない場合は、アップデートの必要があります。別添の「Zoomのアップデート方法(図説)」を参考に、アップデートを行ってください。
- ・ 通常、Zoomを使用した際に通知が出て、自動的にアップデートされている場合がほとんどですが、今回のご参加にあたり、アップデートの確認を行うことを推奨します。

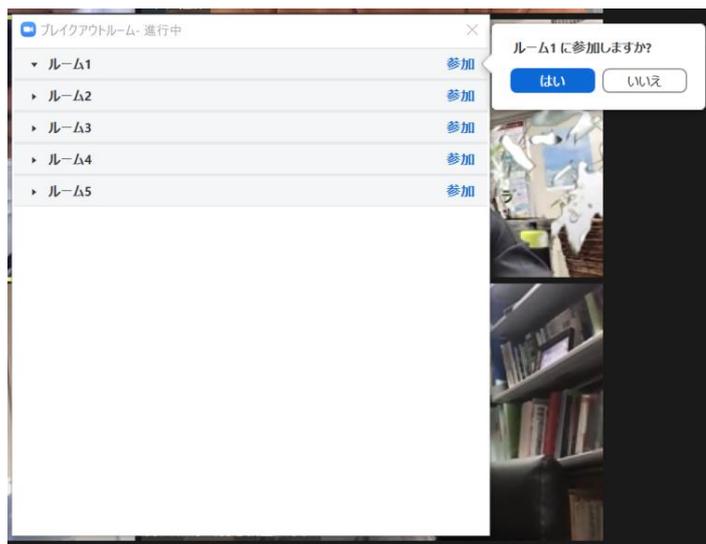
【ルーム移動マニュアル】

①ブレイクアウト開始時の画面について



- ・ 上のような画面が出てきますので、入室したい部屋を選び、「参加」を押してください。

②入室方法について（PC など）



・左図のように

「ルーム〇に参加しますか?」と表示されます。

「はい」を選択し希望の部屋に入室してください。



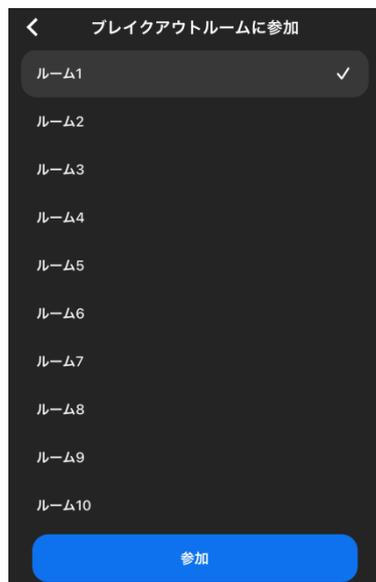
・Mac では左図のように表示され、

ルームにカーソルを合わせることで

「参加」ボタンが表示されます。

②入室方法について（スマートフォンなど）

- ・ iPhone 等では下図のように、画面をタップすることで「ブレイクアウトセッションに参加」ボタンが表示されます。



- ・ 左図のように選択肢が表示されますので、希望の部屋を選び、「参加」をタップしてください。

- ・ ブレイクアウトルームに入室後も、同様の手順で部屋を自由に行き来することが可能です。

【注意事項】

- ・ 参加するデバイスに関わらず、アップデートが完了していれば同様の操作が可能です。
- ・ 「ヘルプを求める」ボタンは極力使用しないでください。

③入室する部屋の選択について



- ・ブレイクアウトルームの進行中は、左図のように、どの部屋に誰がいるかを確認することができます。
- ・希望の部屋を選択し、自由にご移動ください。

④ルームからの退室方法について

- ・ブレイクアウトルームを退出する際には、青色のボタンを押してください。
- ・赤色・黒色のボタンを押すと、Zoom そのものから退出してしまうので注意が必要です。



《留意事項》

- オンライン会議システムの使用により、第三者の悪意によってメールアドレスを含む個人情報及び参加・発表内容の情報漏洩が生じる可能性が完全に排除できないことをお含みおきください。
- 所属機関によってはインターネット接続をブロックされる場合もありますので、その場合は所属先の担当部署にご相談ください。
- 発表者・参加者のPCおよびインターネット接続の問題による、参加・発表におけるトラブルは責任を負いかねます。予めご了承ください。
- [発表者] オンラインの発表は著作権法上の公衆送信にあたりと考えられます。発表に使用するスライド等で用いる資料等のコンテンツは、著作権等の問題をクリアした上で使用ください。
- [参加者] 発表者の許可なく、受信画像、発表資料の録画（画面キャプチャ含む）、保存、再配布することは禁止とします。

資料 ◆「キャンプ研究」収録題目一覧

■第1巻(1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務

[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告 ●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

■第2巻(1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創

[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する

[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

■第3巻第1号(1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育「水辺活動」実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

■第3巻第2号(1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム

●思春期女子キャンパーの理解と援助

[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分にはばす影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学びの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

■第4巻第1号(2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターばちばちハウス リフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

■第4巻第2号(2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル 2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ

[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

■第5巻第1号(2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾新しいコンセプトを持ったシルバークャンプのこころみ

[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

■第5巻第2号(2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンパク大学の幼児キャンプ ●“共育”活動としての幼児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉 YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～

[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

■第6巻第1号(2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ～馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討～ ●人と人 つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通しての人とのかかわり 第1回 ハッピーイルムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 驚敷キャンプ場 川内学童クラブ 驚敷キャンプ場での試み

■第6巻第2号(2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発一港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ

[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用 ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ―「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から― ●親子いきいきリフレッシュキャンプ事業中止から学ぶこと

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発―湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み― ●子どもと共に創るキャンプ(I)―白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から―

●子どもと共に創るキャンプ(II)―白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から―

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間―わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して― ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究―国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して― ●キャンプ実習における状態不安に関する研究―係の役割に着目して―

■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム― Wilderness Education Association を事例として―

■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(III)―白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から― ●閉鎖症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006 ー第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義―小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ―野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後にはばす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入したASEが参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふぉーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むると実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分にはばす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告 [ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告―4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告―チャレンジ2702 ☆

事業の試みからー ●ユニバーサルキャンプ 2005 in むろと
[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び
●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第10 巻第3号(2007/3/30)
[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初の WEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第11 巻第1号(2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 ー第11 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ●2007 ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き-AOCF 創立- ●"WILDERNESS FIRST RESPONDER"野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告
[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究～花山キャンプを事例として～ ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的变化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ～10 年の軌跡～

■第11 巻第2号(2007/9/30)
[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間づくりとエコ・キャンプをめざしてー野外活動を通して気づくことー
[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究ー身体障害者模擬患者を通してー ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第11 巻第3号(2008/1/30)
[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある
[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援についてー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー
[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響
[報告] ●第11 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ(キャンプ場編)～

■第12 巻第1号(2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 ー第12 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動(実修)についてーメイン州、キャンプ・オーアトカの場合ー ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバ! 能登震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟ー「雪のそごい! を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008」 ●ぼるぼるキッズ 2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の(小学ー大学)男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発ープロジェクトアドベンチャーの手法を応用してー ●連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告ー他団体との連携と運営のポイントに着目してー ●「若者自立支援事業」[本当にやりたい! ことプロジェクト]実践報告 ●「読書」による観想的キャンプ生活ー中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に着目してー
[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてーキャンプが青少年の成長に及ぼす効果ー ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてープログラムと自然・生活環境に着目してー ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けてー参加者と指導者に着目してー

■第12 巻第2号(2008/9/30)
[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの

試み「あしがらシニアキャンプ」

■第12 巻第3号(2009/1/31)
[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識ー不満足評価の視点に着目してー
[報告] ●キャンプディレクター2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第12 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ(指導者編)～

■第13 巻第1号(2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 ー第13 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割ー米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラムー ●病氣とたまたかう子どもたちに夢のキャンプをー医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組みー ●休止スキー場を活用したキャンプの試みー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー ●指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状ー天津市山野運動基地ー ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者を指導する女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジドリフタックスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える(1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状ー子どもの育つ環境による自然体験の違いー
[ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試みースケートキャンプの実践報告ー ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1 年目結果報告ー ●Means-End Analysis を用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8 年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因ー鹿沼市自然体験交流センターを事例としてー ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

■第13 巻第2号(2009/11/30)
[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009 年全米キャンプ会議に参加して～
[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察
[報告] ●第13 回日本キャンプ会議全体会報告～みんなでつくるあしたのキャンプ(安全管理編)～

■第14 巻第1号(2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010 ー第14 回日本キャンプ会議特集号
[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●G.N.C.A. スプリングキャンプ「ドリームキャンプ」報告 ●JALT プログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響 ●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー ●発達段階に応じたキャンプ効果の比較ーメタ分析を用いてー ●キャンプにおける場の力ーウィルダネス体験に着目してー ●日米交流サマーキャンプ 20 年の歩みーその 1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership 参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカントリースキーを求めたのかーバックカントリースキーへの移行に注目してー ●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究ーコンジョイント分析の適用ー ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について
[ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討ー「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定ー ●日米交流サマーキャンプ 20 年の歩みーその 2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果ー2 ヶ年調査結果の分析ー ●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ 2009 効果測定調査報告 ●体験型プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会 100 年の歴史

■第14 巻第2号(2011/1/30)
[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハット」調査ーその後にかける対応策とはー ●公園での野外教育実践ープレーパーク活動を通してー ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開
[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究ー山梨県の市営キャンプ場を例としてー
[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する

研究 ●専門高校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

■第15巻(2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーンキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み

[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps ～病児キャンプの世界的ネットワーク～

■第16巻(2013/3/10)

[実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題ー第2報ー

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

■第17巻(2014/3/10)

[実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性 ●父子キャンプ(パパチャルキャンプ)の実践 ●「災害に備える」野外力をきたえよう アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究

■第18巻(2015/2/15)

[実践報告] ●Frost Valley YMCAの教育価値 ●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす影響

[研究論文] ●大切な人を亡くした子どものグリーンキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー ●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響 ●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性～トムラウシ山遭難事故(2009)報告書より～ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析

■第19巻(2016/2/15)

[実践報告] ●民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析 ●高校体育科キャンプ実習報告ースポーツ選手の基礎力を育むことを目指してー ●長期キャンプの意義を改めて考えるー「チャレンジャーキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周 110kmの旅～」の事例からー ●くしろアウトドアキッズスクール 2015 冒険の旅の実践 ●キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

[研究論文] ●不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討ー社会教育施設と適応指導教室の連携事例 ●テーマパークでの修行体験を利用した体験教育の試み～Kidzania 就業体験と野外教育の場合～ ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究

■第20巻(2017/2/15)

[実践報告] ●野外教育法を取り巻く最新の動向 ●ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察

[講演録] ●第6回アジア・オセアニア・キャンプ大会基調講演ーOrganized Camping in Japanー

[特別寄稿] ●組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したものと

■第21巻(2018/2/15)

[研究論文] ●キャンプ実習における大学生の資質能力の変容ーふきだし法による自由記述の分析を通してー ●大学運動部に対するASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響ー新入生と在学生の比較からー

[報告] ●第21回日本キャンプミーティング講演会 自然と手を入れた自然(園芸)の中で～人を育てる野菜作り～

[特別寄稿] ●野外救急法を取り巻く最新の動向

■第22巻(2019/2/15)

[研究論文] ●危険な動植物の識別に関する研究 ●大学生を対象とした短期野外教育プログラムの教育効果に関する研究ー大学生不登校問題に着目してー

[実践報告] ●組織キャンプのプログラムと教育効果ー南会津チャレンジキャンプの実践を事例としてー ●中華人民共和国の小学生を対象とした自然科学学習プログラムデザインの検討 ●北海道キャンプ協会が取り組む次世代へのパトニリレーー次世代野外教育指導者団体「えぞっぶ」ー ●野外教育分野を学ぶ学生ネットワークが果たす新たな「学びの場」としての機能ー「大学間交流スキーキャンプ」の活動報告ー ●子どもの野外体験活動を推進する「鬼ごっこ遊び」の実践とその成果 ●青少年教育施設で発生した冬季の傷病に関する調査報告 ●Leave No Trace を意識した、キャンプにおける食器洗いの実践

■第23巻(2020/1/15)

[研究論文] ●日本における組織キャンプの一つの萌芽ー学習院の遊泳実習についてー

[実践報告]

●留学生・外国人を対象とした野外教育・宿泊研修の注意点ー東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科の事例を基にー ●デイキャンプ実習に参加した C 大学保育・幼児教育専攻学生の生きる力の変容ー先行研究(泊3日)との比較による成果と課題の分析ー ●高校サッカー部新入生を対象とした組織キャンプの実践ーチームビルディングを目的とした Action Socialization Experience の導入ー ●野外で『うまい飯を炊く』調理法の検討ー飯盒炊飯を負の歴史から考えるー ●地域研究: 里山キャンプを考える

■第24巻(2021/1/15)

[研究論文]

●大正時代から昭和時代戦前期までの社会事業における組織キャンプ(その1)ー雑誌『東京府慈善協會報』より『社会福利』に至るまでに掲載された記事にみるキャンプを表わす用語ー ●野外活動において利便性が高いヤマビル忌避剤の検討 ●青少年教育施設における危険度の高い活動・生活行動の現況と安全対策に関する一考察

[実践報告]

●自立と社会性を育む幼児キャンプの実践 ●コロナ禍における大学野外活動実習の実践報告ー大阪体育大学の取り組みー ●コロナ禍における大学教育での「野外活動」の取り組みに関する一考察

[特別収録]

●2020年度夏季のコロナ禍における自然体験活動・キャンプ事業に関する実態調査

ー第24回日本キャンプミーティングの取り組みー

◆日本キャンプミーティング(日本キャンプ会議/CAMP MEETING IN JAPAN) 発表題目一覧

■第1回日本キャンプ会議(1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[研究の部] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ベグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[報告の部] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的变化 ●冬のサブイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために

●「O-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸ー東京)中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第2回日本キャンプ会議(1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[基調講演] ●全日本学生キャンプの草創

[研究の部] ●野外炊さんの薪(マキ)の代替燃料に関する研究

●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●グループを理解する～喘息児キャンプにおけるA子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について(2)

[報告の部] ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後(2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第3回日本キャンプ会議(1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●台湾における童軍(ボーイスカウト)教育に関する研究 ●ACA 公

認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験の展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の実の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●進学塾における野外教育への取り組み ●1ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育けやの森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプとNPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について考える(Ⅱ)～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアボトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラムにおける軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議(2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター)

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議(2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげ～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み ●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●障害児キャンプの企画と運営-YMCA プロジェクト・SEED のケース ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンビズの会員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議(2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み-ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプでする大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告-アウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャンプ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローパー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議(2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイトにおける椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ 2003 ●長期キャンプ「わんぱく子ども宿(10泊11日)」の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター取得者の活動への取り組み ●キャンプと音楽療法 2 ●親子参加型自然学校に関する調査 ●多摩川を題材とした環境教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける女子高生者の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議(2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぱくキャンプ ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●学校へのキャンプの誘い ●大学生を集めるCAMP ●組織キャンプと社会福祉 ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践 ●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタースクール実践報告 ●キャンプインフォメーションセンター相談記録より

■Camp Meeting in Japan 2005 - 第9回日本キャンプ会議

(2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●第12回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004 夏の体験学習 夏! 君の勇気にかん・ば・い ●母親グループが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナーin ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告 ●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成(映像発表) ●雪上キャンプでの動物の断熱効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●自然学校が与えた影響について ●山村留学における相談員の業務 ●野外トレイルの研究 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意識に関する研究 ●災害と野外活動(私の体験) ●OBSプログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりかえりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟(ACF)の創立

■第15回 Camp Meeting in Japan 2011(2011/9/22～25、静岡県立朝霧野外活動センター)

※第15回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立45周年記念第20回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■Camp Meeting in Japan 2012 - 第16回日本キャンプ会議(2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[特別講演] ●「グリーフ(ワーク)×キャンプ」にできること [口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での21日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCA フレンドシップキャンプ一子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子どもたちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査-その1 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●レスキューザックの開発と効果 ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者8,000人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響-その1 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題(第2報) [ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果(3)-4ヶ年調査結果の分析- ●東日本震災被災地でのグリーフキャンプの実施報告「岩手しげんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響-その2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査-その2

■Camp Meeting in Japan 2013 - 第17回日本キャンプ会議(2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性- Outdoor Training Program を導入したTS Camp- ●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴-白山市アドベンチャーキャンプの実践から- ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの4日間」 ●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～ ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリープケアキャンプに参加して～被災地の子どもたちとともに～ ●被災地地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組み-新しい公共型運営について-国立赤城青少年交流の家の取り組みから- ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み(報告)～ [ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現

■Camp Meeting in Japan 2014 - 第18回日本キャンプ会議(2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●LEAVE NO TRACE の日本での必要性と普及について ●環境ボランティアリーダー海外研修(ドイツ)報告 ●組織キャンプにおける Leave No Trace プログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果 ●東京 YWCA 森林ワークキャンプ～プロに学ぶ森づくり体験～ ●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討～わが国での実践にあたって～ ●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査 ●キャンプカウンセラーのユーモア表出

が参加者の集団雰囲気及ぼす効果 ●大学野外実習が体力・メンタルに及ぼす効果に関する研究 ●キャンプの力はこんなところにも！～ストレス耐性を高める効果～ ●ICUジュニアキャンパス・キャンプ～大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践～ ●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み～アメージングガイドができるまで～ ●災害時対策教育プログラムの実践について [ワークショップ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジメント ●アメリカ組織キャンプからの学び ●続・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験 [特別講演] ●海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■Camp Meeting in Japan 2015 ー第 19 回日本キャンプ会議 (2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険教育の動向についての一考察 ～文献による調査を通して～

● Day Camp の可能性～1日の中で子どもたちに主体をあずける～ ●米国キャンプ・オーアトカ(Camp O-AT-KA)における日課プログラムの意義～余暇教育としてのキャンプ・プログラム～ ●北海道教育大学岩見沢校における指導者養成 ●キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響 ●登山におけるストレスコーピングに関する研究 ●スポーツチームに対する ASE プログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響～チーム所属年数に着目して～ ●WEA野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達 ●災害ボランティアとキャンプ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析 ●スキーキャンプのヒヤリハット ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす影響 ●大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征 ●あかぎワールドコミュニティ～余暇教育としてのキャンププログラム～ ●自然体験で地域づくり まえばし・マイはし・プロジェクト ●「海ガキ・山ガキになろう！2014 夏」実践報告 [ポスター発表] ●公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性 ●キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響 ●静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る ●Café de CAMP の作り方～参加者をつくる空間～

[あれこれ発表] ●続々・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●工作体験(お箸づくり)を通じての安全で正しいナイフの使い方～ビクトリックス工作イベントサポートプログラム～

●ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント(実践編) [全体会] 子どもシンポジウム ●ろう(聾)の子どものためのキャンプ～デフキッズキャンプ～ ●被災地域の子どものためのキャンプ～南会津アドベンチャーキャンプ～

■Camp Meeting in Japan 2016 ー第 20 回日本キャンプミーティング (2016/6/4、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表](研究発表) ●国立青少年教育施設における冒険教育プログラムの取組～ジュニアチャレンジ淡路島一周～ ●キャンプ体験が小中学生のアサーティブに及ぼす影響 ●大学キャンプ実習におけるストレスとストレスコーピングに関する研究 ●体育授業における ASE の効果について ●森のようちえん活動が幼児の運動能力に及ぼす影響 (実践発表) ●わが国におけるリブ・ノー・トレイスのこれまでの取り組みと今後の展望について ●知的障がい者に対する日常生活に変化を作り出す地域生活支援～ユニバーサルキャンプを通して～ ●チャレンジキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周 110 kmの旅～ ●千葉市少年自然の家主催事業「セブンデイズキャンプ」の実践報告 ●オブザピッチトレニングとしての雪上野外研修プログラムの実践 ●保育内容研究と自然・生活・あそび ●大学授業での長期バックカントリーキャンプ ●ろう・難聴の子どもキャンプに参加した聞こえるスタッフのふりかえり～デフキッズキャンプの実践から～ ●町田ゼルビアにおける自然体験活動の実践報告 ●2015年多摩の自然学校 ●無人島キャンプの実践 ●米国大陸横断体験記 [ワークショップ発表] ●キャンプで美味しい！コーヒの入れ方教室 ●フィールドワーカーのための危険生物「ハチ」「ヘビ」対策セミナー & 交流会 ●私たちはリスクに対する説明責任をどう果たすのか How do we achieve accountability for risk? ●環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」を体験してみよう [講演会]つながりを生み出すインプロ(即興演劇)

■Camp Meeting in Japan 2017 ー第 21 回日本キャンプミーティング (2017/6/10、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表](研究発表) ●キャンプにおけるボランティアマネジメントの日本と海外の比較調査 ●キャンプにおけるふきだし法の有効性について ●スペシャルニーズキャンプへのボランティア参加による知的障がい者に対する態度変容 ●スペシャルニーズキャンプの学生ボランティアにおける自己効力感の変化 ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ ●わが国の冒険教育の動向から探る現代的課題について (実践発表) ●キャンプにおけるバーベキュー食材の新たな有効性 ●森の幼稚園など自然保育にキャンプの知識と技術をどのように活用

するか ●少年サッカーチームを対象とした継続型キャンプの実践事例 ●第 6 回アジア・オセアニア・キャンプ大会(AOCC2016) 報告 ●大学間交流スキーキャンプの取り組み (団体紹介) ●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ●「出会いと体験の森へ」実行委員会 ●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっふ」 [ワークショップ発表] ●組織キャンプにおけるチャイルド・プロテクションについて ●YMCA 三浦ふれあいの村防災ウォークラリーの取り組み ●ハチ・ヘビ・マダニ・ヤマビル・毛虫 etc…危険生物を楽しく学ぶ 野外教育者のための危険生物クイズ大会！ ●キャンプでのクラフト ●「違いを祝福し、違いを喜ぶ。」キャンプロイヤル体験報告 ●「アイスブレイク十人十色 ～みんなの十八番、大交換会！～」 [講演会] 自然と手を入れた自然(園芸)の中で～人を育てる野菜作り～

■Camp Meeting in Japan 2018 ー第 22 回日本キャンプミーティング (2018/6/9、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表](研究発表) ●アウトドアリーダーシップに関する文献研究 ●危険な動植物の識別に関する研究 ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第 2 報) ●青少年教育施設における指定管理者制度導入の状況と課題 ●参加児童生徒のもつ組織キャンプ経験の自伝的記憶 (実践発表) ●森の幼稚園など自然保育における野外活動の知識と技術の実践 ●こども英語教室ラボ・パーティファミリーキャンプ実践報告 ●キャンプファイヤーにおける民俗芸能のレクリエーションとしての活用 ●キャンプ指導者向けのスノーキャンプ・スキーイベントに関する研修事業の試み ●第 11 回国際キャンプ会議 Sochi・Russia と ICF の活動の報告 ●西表島 LNT プロジェクト (都道府県キャンプ協会取り組み紹介) ●Enjoy Camping! キャンプを楽しむたっぷり学ぶ(東京都) ●静岡県キャンプ協会(静岡県) ●持続可能な協会運営の知恵と工夫愛知県キャンプ協会のとくみ(愛知県) ●近畿ブロックにおけるビジョン 2020 の実施状況(近畿ブロック) ●広島県キャンプ協会の取り組み(広島県) (団体・活動紹介等) ●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっふ」 [ワークショップ発表] ●目からウロコの SAM スペシャル固定法 ●誰でも手軽に自然体験活動が指導できるアウトドアゲーム ●「アイオレシート」の紹介 ●企画博覧会『ヒアリとその他の危険生物展』&危険生物お悩み相談会 ●アウトドアメーカーが直接紹介する最新キャンプグッズ(提供:ロゴスコアレーション) [講演会] うんこはごちそう～人と自然の共生は野糞から～

■Camp Meeting in Japan 2019 ー第 23 回日本キャンプミーティング (2019/6/8、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ポスター発表](研究発表) ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ(第 3 報) ●国際的なキャンプのムーブメントをさぐる-International Camping Fellowship の活動の分析から- ●指定管理者制度導入に伴う都道府県・政令指令都市設置のキャンプ場における公費負担に関する研究

[ポスター発表](取り組み発表) ●障害者支援施設でのキャンプ実践 ●キャンプディレクター2 級養成講習会について-東京都キャンプ協会の事例から- ●第 7 回大学間交流スキーキャンプの報告-その価値と今後に向けて- ●高校サッカー部新入生を対象とした 2 年間の ASE キャンプの実践 ●次世代野外教育指導者団体「えぞっふ」による北海道キャンプフェスタの取り組み ●キャンプ指導者を対象とした研修事業の実際～東京都キャンプ協会の試みから～ ●南郷山天幕生活をふりかえる～日本 YMCA キャンプ 100 周年～ ●大和川を 20km 歩くキャンプ-小学 2 年生にどこまで任せるか?- [特別企画]

●NPO のための弁護士ネットワークによる無料法律相談会 ●日本キャンプ協会指導者養成よろず相談所

[展示] ロゴス商品展示 [展示体験] 野外キャンプ活動は防災活動の基本である [授業] ●野外教育史[招待授業] ●防災減災教育論 ●キャンプと法律(入門) [招待授業] ●キャンプ推理学(歴史編) ●外国人・留学生を対象とした引率方法論 ●キャンプの安全マネジメント ●自然体験活動における絵本活用法 ●組織キャンプにおける大学生カウンセラーの在り方とこれから [特別講演] = 令和時代の新しいキャンプに向けて = 昭和・平成時代の「野外」の変遷とこれからのキャンプに期待すること

■Camp Meeting in Japan 2020 ー第 24 回日本キャンプミーティング 第 4 回オンラインミーティング (2020/11/14)

(研究発表) ●新型コロナウイルス緊急事態宣言下における、子どもの余暇の過ごし方について ●長期自然体験活動が小学生の学校における適応感

に及ぼす影響S 小学校セカンドスクールを事例として●民間野外教育団体の組織キャンプにおけるプロダクト構造の分析
(実践報告)

●〈ONLINE × CAMP 空想キャンプ場〉の取組みと今後の可能性について●コロナでも四季冒険●ろう・難聴児のためのオンラインキャンププログラムの試み:デフ・アドベンチャー・キャンプ・オンライン2020●バーチャルキャンプをしてみよう! ●夏の自然体験活動・キャンプ事業実態調査報告
(ワークショップ発表)

●キャンプ、自然体験の魅力を伝える動画制作の現場から●コロナ禍での小学生冒険プログラムの現場から●石垣島のフィールドからコ

ロナ禍でのプログラム紹介●若手ワークショップ「オンライン OB 訪問」

●オンラインとキャンプをつなげる、農業体験の現場から
(パネルディスカッション)

●これからキャンプ、こうしませんか? ~キャンプの再開から、質の高いキャンプ実践へ! ~

[特別企画]

●スペシャルスピーチ(字幕付き) ~世界の with コロナ×キャンプ~

※ Camp Meeting in Japan 2006 -第10回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 -第14回日本キャンプ会議までの
発表抄録集は『キャンプ研究』(毎巻第1号)として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集/日本キャンプミーティング抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

- ・『キャンプ研究』 各1,000円(税・送料別)
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 各1,000円(税・送料別)

なお、以下の号は完売しました。

- ・『キャンプ研究』第2巻、第4巻第1号、第12巻第3号
- ・『キャン会議抄録集』第1回~第5回

第25回日本キャンプミーティング実行委員

委員長	野口 和行（慶應義塾大学）
委員	熊澤 桂子（東京教育専門学校）
委員	中丸 信吾（日本女子体育大学）
委員	佐藤 冬果（東京家政学院大学）
委員	石川 大晃（アクトインディ株式会社/いこーよ四季冒険部）
事務局	高橋 宏斗

第25回日本キャンプミーティング Camp Meeting in Japan 2021 報告書

2021年11月11日発行

発行所 公益社団法人日本キャンプ協会
National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
TEL 03-3469-0217
FAX 03-3469-0504
E-Mail ncaj@camping.or.jp
